DragonFang

時雨彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤｒａｇｏｎＦａｎｇ

【Ｎコード】
Ｎ６９７６Ｆ

【作者名】
時雨彼方

【あらすじ】
セトナ大陸で屠竜屋『生きた心地』を経営する二人。大陸ではそこそこ名の売れた二人に舞い込む政府からの依頼。それを深読みもせず引き受けてしまう二人だが……

Prologue（前書き）

一部戦闘描写等に残酷な表現が含まれます。ご注意下さい。

Prologue

『Dランク20体掃討完了』

頭に響く無機質な電子音を聞きながら目の前の敵に銃弾を放つ。
着弾し、鱗を貫通して脳髄に達しそれでも飽き足らずそのまま後頭部から弾丸が抜け出す。それから一拍置いて赤い肉とピンクの物体が飛び出る。
ソレを滴らせた相手は大きな音と共に地面にひれ伏した。

「くそったれ。服に血が付いた……」

俺は白いのコートに付いたその血を忌々しげに見ると相棒のいる場所まで走り出した。いくら強化系術式を使用してるからって相棒の速さはおかしい。絶対チーターより早いと思う……。

『遅いぞ。すでにこちらはAランクを残すほかすべて殲滅した。』

相棒からの報告を聞きながらその場所に向かい疾走する。
相棒は速さもさることながら強さも常人を逸している。例えるなら蟻が熊を倒すくらいか。
むぅ、自分で言ってて意味が分らん……。まぁ、とにかくやばいってことだ。

「うっさい、こっちはあと10分でそっちに着く！」
『では、Aランクを喰す。』

労いの言葉の一つも無い相棒に辟易しながら目的の場所に向かう。
向かったところでどうせ片付いてるんだろうが……。

あぁ、そういえば紹介が遅れた。俺の名は『ロステル』。真っ赤に燃えるような赤い髪に見るものを恐怖に陥れる黒い瞳、さらには整った顔立ちはアイドルも逃げ出すほどの作りの美男子（すべて自称）。それが俺だ。ちなみに、相棒と二人で屠竜屋『生きた心地』を営んでいる。

あんまり紹介したくないが相棒は『ミリス』。女みたいな名前だが立派な男。身長２ｍ２０ｃｍと大柄で顔は女みたいな優男だがその顔には右に真っ赤な龍が昇る刺青をしていて、髪は黒く瞳は透き通るような青（一部ひがみ表現あり）。そして、戦闘狂。それが相棒だ。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

昔、授業中に書いてたものを息抜きがてらに手を加え載せて行きたいと思います。（サボってたわけじゃ……）

ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします。

・1　依頼

俺は先ほど終わったばかりの依頼の報告書を書き上げている。その隣のソファでは相棒のミリスが足を組んで悪態を吐いている。

「まったく、つまらん。最近の屠竜以来は低ランクのモノしかないのか……」

俺達は屠竜屋『生きた心地』を営んでいる。屠竜というのはセトナ大陸の半分を占める規模で生息している数多くの『竜』を討伐することだ。これは基本的に街や人などに被害を与えた竜を討伐することだ。俺達はそれを依頼という形で請負、金銭を貰って生計を立てていると言う訳だ。

そして、竜にもランクがあり一番下はFからSSランクまでが居る。強さはイコール歳を重ねた分というのが竜への常識だ。竜の中には齢三千歳などゆうに超えるやつが居る。そんなやつとは対面も戦闘もご勘弁願いたいがね。

「SSランクほどの竜と殺りあってみたい。」

あぁ、ここの戦闘狂は竜の最強ランクであるSSランクと戦いたいとか言ってる。

しかし、いつものことだから俺は華麗に無視を決め込むと報告書と請求書を書き上げ筆をおいた。そして依頼書が入ってないか事務所入り口にある郵便受けに向かった。そこには5通の郵便が来ていた。水道料の請求書、電気代の請求書、事務所賃の請求書、家賃の請求書。実に請求書ばかりだ。まったく、世の中は世知辛いと思う。

だが、手に取った5通目は違った。白い封筒の四隅には金の蔦をあしらった刺繍が施してあって裏の封をする所には王冠に剣が交差

する政府のエンブレムで留めてある。

「大変だミリス。政府直属の依頼が舞い込んできた。」

政府直属の依頼というのはヤバイのが多い。やれＡランクを討伐しろだのやれ１００体のＥランクを討伐しろだの常人では抱え込みたいくない依頼が多い。

まぁ、その分報酬は桁違いなのだが……

「ほぉ……。それは面白そうだな。ちゃっちゃっと受けてしまえ。」

この戦闘狂は内容も確認しないで受けろだろ？　馬鹿を言うのも大概にしろ、と心の中でだけ叫んでおく。実際叫んだら殺される気がする。

依頼書の封を開け中身を確認した。その内容に頭を抱えたくなりながらどうやって断ろうかと考えを巡らせる。しかし、いつ取られたのか分らない速さでミリスに依頼書を持っていかれそのまま依頼を受けることに同意したサインを書かれていた。

「ちょっとまて！　さすがにＳランク１体討伐は考えろ！」

「言っている意味が分らない。とりあえず、返書してくる。」

有無を言わさずミリスは光の速さ（誇張表現では無い）で郵便屋に行ってしまった。

依頼書の内容は噛み砕くとＳランク竜の討伐。それにともなう経費等々は政府持ち。あわよくばその竜の巣を確認してそこもすべて消し去ること。それが出来れば一生遊んで暮らせるほどの報酬を出

そう、というもの。

絶対に怪しいと思いつつすでに断れない事を悟り、俺は事務所を出て他の４通にあった支払いをしに行くのだった……

・1　依頼（後書き）

ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします。

・2　訪問者

相棒が無理やり返書を出して数日、何の音沙汰も無く過ぎていた。今日もどうせ何もないだろうとインスタントコーヒーを淹れ事務所で寛いでいた。相棒は『依頼主からの連絡があれば呼べ』と言って何処かへ修行へ行ったらしい。どうせ竜と戯れてるんだろう。

太陽が上がりきった正午、事務所の前で１０人程度の足音が聞こえた。それらが事務所の前で止まったと思うと急に扉を開けやがった。勢いが強すぎたのか内開きのドアは蝶番が壊れ無残にも部屋の中へ倒れた。弁償させてやる！

「なんだお宅ら。急にやってきて事務所の扉ぶっ壊すんじゃねぇ！」

そう言って俺は腰のホルスターから銃を取り出し突きつけた。そしてそいつの着ているコートの襟章を見て気づく。襟章は王冠に剣が交差した政府のシンボルだった。

「貴様。我らを何と心得る！」

先頭に立っていた口髭眼鏡の『いかにもお偉いさん』が怒鳴る。

「政府のお偉いさん。でも、扉を壊して入ってきてるんだから文句は言えねぇだろ？」

俺がそういうと顔を真っ赤にして振るえてやがる。短気は損気って言うんだけどね。

政府が嫌いな俺は銃はそのままに睨みあった。

「やめないかイゴール。明らかにこちらに落ち度がある。すまなかったな、政府の者とものあろうものが無礼をした。」

急に後ろから現れた金髪碧眼のかなり綺麗なおねぇさんはそう言うと頭を下げた。そう言われてしまっては銃を降ろさないわけには行かない。

「あぁ、頭を上げてくれ。後ドアは弁償してくれ。そいで直接来たって事は依頼の件でいいのかな？」

頭を上げるとおねぇさんはイゴールと呼んださっきのいけ好かないやつとその部下を事務所の外に追いやった。きっと一番偉いに違いない。

「はい、今回は依頼の件で伺いました。受けていただきありがたく思います。」

「いえいえ、で期間と竜の特徴とか教えてくれるのかな？　あとあんたの名前。」

俺がそういうと彼女はコクリと頷くと話し始めた。

「私は、政府直属竜討伐特別機関隊長のペリエです。竜討伐についての「ちょっとまった！」」

「あんた、あの竜討伐機関の隊長なのか？」

俺は驚いて聞き返してしまった。何故なら竜討伐機関というのは少数精鋭約５人程度の人数しか居ないにも関わらずＳＳランクの竜討伐や政府高官たちの護衛など結構すごいことをやってる所だからだ。そこの隊長っていうと筋骨隆々でいかにもな人間だと思っていた。しかし目の前には綺麗なおねぇさん……。聞き返すしかないだ

ろ……。

「えぇ、私が隊長を勤めております。何か問題でも有りますか？」
「いや問題とかじゃなくて意外だっただけだ……。話を続けてもらって構わない。」

頭に？を浮かべたまま頷くとペリエ隊長殿は話を戻した。

「我々の追っている竜の特徴は銀髪で銀の瞳。性別はメス。人型で討伐理由は連続殺人です。」
「ほぉ……。珍しい人型か。それでSランク認定なのか。」
「はい。ただ、年齢が分らないのと能力も未知数で正直Sランクで納まるのかは分りません。」

冷静に対処しているようで俺は内心かなりビビッてた。

竜には一般型、人型、不死型の三種類が居る。
一般型はファンタジーに出るような羽が生えていて尻尾があり4足歩行や2足歩行で歩く。人型は人の形に類似しており髪の色や瞳の色は各々人間と同じように違うが人と決定的に違う部分がある。人型の額には縦に細長い赤い宝石のようなものが付いているのでそこで人との区別を付ける。不死型は実際不死ではないのだが死んだ一般型の竜が稀に腐敗した状態で生き返ることがある。それを不死型と呼んでいる。
強さは順に人型、不死型、一般型となっている。

しかし、やっかいだな……。人型は竜で一番強い部類じゃないか。それのSランクなんて手を出したくない。今ここでやめられないだ

ろうか。

「なぁ、それって今更やめ……。」

「お前は何故依頼を断ろうとする？」

俺は何時現れたのか分らなかったミリスに剣を突きつけられ二の句が言えない。それを見たペリエ隊長殿は驚きの表情を隠せない。

それはそうだ。だって隊長殿にも気づかれないで登場してるんだから。

「と、とりあえずこちらでも善処はしているので情報や仮に討伐した場合などこれで知らせて欲しい。」

すこしどもりながら隊長殿は机の上にイヤリングを置いた。情報伝達用のイヤリング『インカム』だ。

相棒はそれを受け取りさっそく耳に着けていた。俺もそれに習いしぶしぶ着ける。

「了承してくれて何よりだ。それではまた逢おう。」

そう言って立ち上がって部屋を出ようとした隊長殿を相棒は制した。

「待て。敵がどういった人間を襲撃するなどの情報は無いのか？」

「あぁ、すみません。相手は『若い男』で『メガネ』を掛けている人間しか狙っていないようです。」

「了解した。それでは行っていいぞ。」

そう言われると扉のあった場所で一礼すると部下を連れてどこかへ行ってしまった。

それにしても何故相棒はいつも上から目線なのか謎だ。

「よし、そういうことだからアクセサリーショップに行くぞ。」

「いや意味分らんよ。どう……ぐふっ……。」

異議を申し立てようとしたらボディーブローを食らい俺は気絶した。

翌朝目を醒ますと相棒が残忍な笑みを浮かべてスーツとメガネを両手に持って。

「囮捜査だ。がんばりたまえ。」

そういうと有無を言わさず服を剥ぎ着替えさせた。

やっぱりこうなるのか……。囮中に俺が死んだら一生恨んでやる、と心の中で呟いた……。

・2　訪問者（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

・3　襲撃

俺は無理やり着替えさせられ囮捜査をすることになった。
とりあえず、昼間は被害にあったお宅訪問、夜は街を適当に徘徊して襲われるのを待つ。正直乗り気じゃない。だって襲われたら死ねる……。

「はぁ、死にたくないぜ……。」

ため息を吐きながら被害者宅3件目を訪問する俺。他の2件では有力な情報が得られなかったので3件目に期待したい。

「こんにちわ。屠竜屋『いきたここち』です。今回の事件の事をお聞きしたいのですが。」
「屠竜屋さん？　わかりました上がってください……。」

そういうと部屋のリビングに通された。結構広いなぁ、18畳くらいあるんじゃないだろうか。一通りリビングを見回すとゆうに5人は掛けられるソファーの真ん中へ座った。それに合わせるように目の前のテーブルに紅茶の入ったカップが置かれる。

「ありがとうございます。それでは旦那様が殺された日の事をお聞かせ下さい。」
「はい……。旦那はその日――――」

奥さんの話を纏めるとこうだ。
その日旦那は会社に行くために朝家を出た。そして何事も無く仕事を終えて帰宅。リビングで寛いでいたところ竜の襲撃にあう。そのとき奥さんには目もくれず『わが子の恨み』と言いながら旦那を

惨殺。

たぶんこの家で竜の容姿が割れたんだろう。しかし気になるのは竜の言った『わが子の恨み』と言う言葉。これが本当なら旦那はその子竜を殺したことになる。しかし、奥さんはそんなことをする人じゃないといっていた。陰でやっていたなら奥さんにも分らないだろう。

「有力な情報ありがとうございました。必ず旦那さんの仇はとりますよ。」

俺は営業スマイルでそういうと家を後にした。

あの家を出て喫茶店でお茶を飲んでいたらすでに外は暗くなっていた。

そろそろ夜の生贄作業に移るか。すごい嫌なんだけどね……。

喫茶店を出て1時間ほど歩き所謂(いわゆる)裏通りへ出た時に空気が変わった。冷たく射抜くような目線を感じ周りの空気も重くなる。

(さっそくお出ましか……。それにしても相棒はどこにいやがる……!)

心の中で相棒への悪態を吐いていると後ろからヒュッと何かが飛んでくる音が聞こえた。俺は反射的に横に跳びソレを回避する。先ほどまで自分が居た辺りを見るとその部分が抉れていた。

「さっそくお出ましか!」

俺は音のした方に銃を突きつけながら振り向いた。そこには銀髪に銀の瞳。額には真っ赤な細長い宝石を付けた人型の竜が立っていた。

そいつは無言で俺のほうに駆けて来る。そしてその勢いを殺さずさらに踏み込むと右ストレートを放ってきた。俺はいざと言うときのために反射神経を術式で高めてあったのでソレを右に身体を捻る形で辛うじて避ける。だが頬を掠ったのか薄皮が切れ血が滲んだ。

避けられたことに対して驚いてないのか手を素早く引き戻すと踏み込みに使った左足を軸にして回し蹴りを放つ。さすがに回避不可能な状態だったので咄嗟に両手を前でクロスして防御した。しかし予想外に威力が強かったためそのまま身体は宙を浮きビルの壁に身体がめり込んだ。

「げふっげふっ！　ざっけんな勝てるわけねぇ！」

悪態を吐く俺を遠くから見下すように見る竜。

竜は前かがみの姿勢になるとそのままこちらに向かって駆け出してくる。

俺が人生の終わりを覚悟し目を瞑ると前方で大きな音がした。

「ふん、俺の相棒とあろうものが死に損なうとわな。」

「うるせぇ馬鹿！　どこ行っていやがった男女ぁ！」

「ふ、ピンチに出た方が格好良かろう？」

馬鹿（ミリス）はそういうと目の前で自身の爪を弾かれたことに驚いている竜に向き直った。

竜は一歩後ろへ退くと。

『次こそはわが子の恨みを……』

そう言い背中の翼を広げると満月の空へと飛び去っていった。

・3　襲撃（後書き）

ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします。
次回は遅いかもしれませんが番外編で『術式』について主人公二人による解説をしていきたいと思います。

閑話　術式について（前書き）

術式の説明となります。話が前後してる感じがしますがすいません。

作者→作　ロステル→ロ　ミリス→ミ

閑話　術式について

作「えー、というわけで今回は術式についてをお送りしたいと思います！」

ロ「後の戦闘描写とかで重要なのに今更とかどうなの？」

ミ「まったく、信じられんな。私は向こうで寝てる。終わったら起こせ。」

作・ロ「「お前も説明するんじゃ！」」

ミ「ちっ……。しかたない、続けろ。」

作「はぁ……。なんでこんな上から目線のわがままっこになっちゃったんだかお父さん悲しい（泣）」

ミ「貴様を父親にもった覚えなど無い。」

作「ひ、ひどい！」

ロ「……。話が終わりそうに無いから術式について説明始めます……。」

作「あ！　そうだった。基本は俺から説明するね。」

ロ「まったく、忘れるとか作者としてどうなんだ……。」

作「細かいことは言わないんだよ！　まず術式って言うのは魔法み

たいなものだと思ってください。火の玉が出るとか氷の槍が飛ぶみたいな。それで術式には3つあります。種類は詠唱術式、付与術式、強化術式です。ロステル君が主に使うのは付与術式と強化術式。たまに詠唱も使う感じですね。ロステル君は、詠唱と付与を説明して。ミリス君は強化をおねがいしますー。」

ロ「火の玉とか氷の槍って……。まぁいいか、とりあえず説明しますわ。」

詠唱術式とは呪文を唱えて術式を発動することを言います。これはセンスと頭が痛くなるような勉強をしないと使いこなせません。その代わり付与術式と違って精神力を使わないから安全って言えば安全だな。

付与術式は物質に呪文を刻む又は詠唱術式を直に打ち込むこと。付与術式を使われた物質は詠唱しなくてもその術と同じくらいの威力だったり効果だったりを発揮することができるんだけど、使用対象者の精神力を蝕むんだ。連続使用とか身の丈に合わない付与の物を使うと精神崩壊とかするけど、セーブして使えば全然問題物なんだ。

ロ「こんなところかな。じゃぁ、相棒強化について頼むぜ。」

ミ「めんどうくさい。作者がすればいいだろうに。」

作「……。しかたない、ミリス君は絶対しないだろうから俺が説明するか……。」

ロ「なんてあまいやつ……。いや、後が怖いのか……。」

強化術式とは、身体能力向上もしくは付与術式の掛かった物質の効果を高めるもの。
基本的にペンなどで術式を直に書き込むことで効力を発揮する。付与と違い詠唱を打ち込むことでは強化できない。強化術式はソレを行う本人が行った付与術式の物に強化を施す場合他者の行った付与に強化を施すよりも強化係数が2倍くらいになる。さらに本人の血液で（かなり高等技術）強化を行うと2．5倍くらいになる。ロステルやミリスは付与も自分達で行えるので付与と強化は本人が行っている。ちなみにロステルは無理だがミリスは血液強化ができるので強化を使う術者としては高位ランクにあたる。

作「こんなもんかな。」

ミ「掻い摘めば、俺は最強と言うことだな。」

作・ロ「「はい、それでいいです・・・・・・」」

作「それでは、皆様本編をお楽しみ下さい。」

閑話　術式について（後書き）

分りづらいところありましたらご指摘下さい。
ご意見ご感想もお待ちしております。

・4　昇格試験

あれから数日俺は相棒にしごかれる事となった。理由は簡単で竜に殺されそうになったから。正直俺は弱い方ではない。何故なら一応屠竜屋にもランクがありそれの最高位の1個下、Sランク取得者であるからだ。まぁ、相棒はSSなんだけどね……。

しかし相棒からすると雑魚の様で『目標は1週間後の昇格試験合格だ』とか言われえて有無を言わさず強化合宿中。

SからSSになるにはSSと互角に渡り合うか屈服させなければいけない。かなーりハードルが高いのだがそれをしろってことらしい。

まぁ、ランクが上がればその分報酬も増えるからいいんだが……。

「何をボケっと考えている。無い頭で考えたところで何も浮かばんだろう。」

そんな事を考えていると前方からお声が掛かった。

うっわー、超むかつく。俺より数段頭が弱いくせによく言うぜ！なんて言葉は胸にしまう。行ったら最後冥土での土産を買って来いとか言われそうだ。

「いや、なんでもない。ほら竜の情報ないかなぁって思ってただけだよ。」

俺ナイスフォロー！　相棒は暫し考えて口を開いた。

「あぁ、どうでもいいな。どうせまたお前が囮になればいい事だ。」
ちょっと！　俺が囮とか本当にもう勘弁してください……。

そんなこんなで強化合宿も終わり試験当日。快晴に恵まれた。
俺の他にも昇格試験を受けるやつが居るみたいだ。いかにも詠唱が得意そうなやつや筋骨隆々の肉弾戦型など実に多岐に渡り１０名くらい居る。しかしＳＳ挑戦は俺しか居ないらしく俺は最後まで待たされた。相棒は俺の番が来るまで寝てるらしい。

遂に俺の番が来た。試験をする場所は円形のまるで中世にあった闘技場だ。しかし周りの壁や観客席を護る透明なシールドは最強の術式を喰らってもヒビが入る程度の超頑丈なものだ。
そこまでする必要があるのかね……。

試験会場の中央で立って待っていると試験官側のゲートが開いた。そこから出て来たのは見間違えるはずが無いあの綺麗なおねぇさん。ペリエ隊長殿！　ペリエ隊長は以前のコートではなく肩や肘胴回りだけを護るプロテクターのようなものをした姿で現れた。

「ロステルさん。がんばりましょう！」
「はい！　隊長殿！」

俺がそう言った直後に開始の合図が場内に響き渡った。

ペリエは親指を噛んだ。俺はその動作の意味を咄嗟に判断する。きっと血液による強化を行うつもりだ。そんなことはさせられないので俺は走りながら右手でホルスターにしまってある銃を取る。そして何かを顔に書こうとしたペリエに向かって発砲した。弾には付

与がしてあり人間の頭くらい簡単に貫通できるほどの威力にしてある。
銃を取り出した俺の動作にペリエは咄嗟に反応し右に跳ぶ。書き終えてない術式を完成させるべく俺の周りを駆け出した。俺は銃で牽制しつつペリエとの距離を詰めるべく走り出した。至近距離での攻撃はしてこないと思ったのか少し驚いた感じのペリエだったがすぐに気を取り直して腰の剣に手を当てる。顔には幾何学模様が書かれていた。

術式は完成したのか……。

ペリエは剣に手を当てただけで抜刀していない。俺はここぞとばかりに駆け寄ろうとするが一瞬首に寒気を感じ立ち止まった。その瞬間喉下が薄く切れる。なんの事だか分らず、とりあえずペリエから距離を置き彼女を見た。彼女も驚いた顔になりその後うっすらと笑みを浮かべた。

隊長怖いっす……。

「私の剣戟(けんげき)を避けるなんてすごいですね。楽しめそうです。」

そうにっこり笑うと真剣な顔になり駆け出してきた。その速さは相棒にも引けを取らない速さだった。一気に距離を詰められた。先ほどの剣戟がどんなものかまったくわからなかったのでとりあえず腰のダガーを引き抜くと勘で左の首の辺りを護るようにする。次の瞬間顔の左側から甲高い音が聞こえそちらに目を移すとそこにはペリエの剣と俺のダガーが交差していた。
ペリエの剣は漆黒で見たことの無い剣だったがその平の部分に書かれている術式を見て絶句する。

（最高位付与式……。）

そこに刻まれていたのは最高位付与術式『月光蝶』。東洋圏独特の術式なのだが世界で刻めるのは5人と居ないだろう。その能力は痛みも無く切り裂き斬られた方は自分が斬られたも気付かないほどになるという。俺が付与術式をしていなかったら今頃ダガーと一緒にあの世行きだ。

俺はその剣を力任せに押し返すことはせずダガーを滑らせ後ろに逃げた。勢いを殺せなかったのかペリエの剣はそのまま空を薙ぎ腕が伸びきる。その瞬間を俺は逃さず踏み出してダガーをを喉下へ突きつけるべく踏み出そうとするが本能がそれを止めた。その瞬間返し斬りをしたペリエの剣が前髪を持っていきそのまま鞘に戻った。

ペリエは息をも吐かせないらしい。鞘に剣を戻すとすぐに一歩踏み込み剣戟を与えようとする。俺はバックステップで後ろに距離を取りながら銃を撃った。銃弾は見事ペリエの足を捕らえたかに見えたが甘かった。ペリエは避けようとせずその銃弾を剣で弾いた。超至近距離での発砲に関わらずその銃弾は真っ二つにされ力なく地に落ちる。ペリエは更に返しの一撃を当てるべく踏み込む。俺はその剣戟を避けるべくもう一度バックステップする。

「逃げてばかりでは勝負は付きませんよ？」

剣を鞘に戻しそういうとまた駆け出す姿勢に入る。

「分ってます。次で決めますよ。」

俺はそういうと左手のダガーを逆手に持ち正面に構えた。それを見て楽しそうに笑うとペリエは神速のスピードで間合いへと入って

くる。俺もソレに合わせ一歩踏み込むと右手の銃を剣戟が来るであろう位置で発砲した。その算段は見事に当たり剣に命中した。しかし弾丸が合ったにも関わらずその剣線はずれることなく向かってくる。俺はソレを予測済みだったのであえて銃口を逸らさない。剣は俺の予想通りに銃口に食い込み先に進むことも後に戻ることも出来なくなっていた。

それを確認すると俺はすぐに左手のダガーをペリエの首に振り下ろす。ペリエは短く舌打ちをすると剣を放しバックステップで避けた。俺は避けられるのは承知だったので剣の刺さった銃を脇に投げ捨てると自身も後ろへ一歩引いた。

「予想外です。結構硬い術式を使えるのですね。」

「俺も予想外。月光蝶なんて卑怯だろ。」

お互いに感想を述べる。その様子に観客は息を呑み食い入るように見つめていた。

「じゃぁ、隊長殿。最後の一立ち回り行きますよ！」

俺はそういうと姿勢を低くしてペリエへ駆け寄る。ペリエは右手を前に出した形の構えを取っている。素手でも戦える様だ。

俺は間合いに入るとダガーを顔目掛けて投げた。さすがに予想外だったのか驚きに目を開いたペリエだが顔を右に逸らし避ける。しかしその動作ので出来た少しの隙を逃さずに俺は腹目掛けて回し蹴りを放った。防御の姿勢を取れなかったペリエは蹴りをまともに喰らい少しよろめく。さらに追い討ちを掛けるべく一歩踏み込みボディーブローを放った。さすがに同じ位置に2度攻撃を喰らうのはきついらしく、うぇっと言う肺の空気を押し出されたかの様な呻き声をすると両膝をついて降参をした。

その瞬間俺のＳＳ昇格が決まったのだった。

その後ペリエは相棒ともう一戦することになるのだがそれはまた別の話。勝敗はもちろん相棒の勝ちだったが……。

・4　昇格試験（後書き）

大半が戦闘描写でしたがどうだったでしょうか。
分りにくい点ありましたらご指摘下さい。

ちなみにペリエが書いていた付与は動体視力を上げるためのものです。二人の速さ（攻撃速度、移動速度）等を上げていたのは付与装備による効果になります。

ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします。

・5　強襲

昇格試験から一週間。事件は起きずに平和な街と化していた。しかし、俺達の仕事が終わったわけではないので事件についてや犯人についての手がかりを調べてるために政府が管轄する資料室へと足を運んでいた。

「それらしい資料は無いな……。相棒は何か見つけたか？」

「……ぐぅ～……」

ちょっとまて、なんでこいつは優雅にイスに座って寝てやがる……！

俺がそんなことを思って手をわなわなと震わせていると二階へ上がる階段から声がした。

「相変わらず苦労させられてるんですね。」

緑の髪と蒼眼、長身で眼鏡を掛けスーツをビシッと決めた優男。クロイツだ。

クロイツは昔からの付き合いで気の知れたやつだ。

「あぁ、相棒はいつもどおりさ。いい加減利口になってもらいたいものだぜ。」

そんな事を言ってため息を吐いてる俺に笑いながらクロイツはある資料を投げて渡した。

「それ、今回の事件に関係あると思って引っ張り出してみたんですよ。」

クロイツの渡してきた資料は実に興味深いものだった。
内容は連続殺人の起きる四日ほど前に起きた無害指定の竜の連続屠竜の物だ。
無害指定って言うのは人間に害を及ぼす危険が無いと判断された竜の事でこいつを屠竜するのは禁止されている。しかし、それを連続的に行ってるやつらがいたってことだ。
そいつの名はアルフレッド。結構名のある屠竜屋で俺らも一緒に仕事をした事があるが結構な手並みだった気がする。
そんなことはどうでもいいんだが、その屠竜された竜の中に銀髪の人型で銀の瞳の子竜が居たらしい。その容姿からするにたぶん連続殺人を行っているアイツの子だろう。他にもアルフレッドは眼鏡を掛けてる事や『子の仇』などの発言を踏まえれば安易にその想像に行き着く。

「クロイツ、サンキューな。いろいろ分ったがやっぱり同業の仕業となると複雑な心境だな……。」
「まぁそうだね。でもここ最近めっきり事件は起きてないみたいだから怒りは収まったのかもね。」

竜の怒りはそんな事で収まるはずも無い。たぶん俺達を探してるんだろう。近いうちにまたコスプレでもしないといけないのかな……。嫌気が差す……。

「まぁコレでここには用がないから相棒を起こして事務所にでも帰るよ。」
「うん、またね～。」

そういうと俺は相棒をやさしく怒られない様にたたき起こしてに帰路に着いた。

その夜は作戦会議をしていた。竜をおびき出す方法、屠竜の方法・・・etc

「まぁ、貴様が変装して襲われてるところを颯爽と俺が竜を細切れにすればいい話だろう。」

「簡単に言うな。それと颯爽と来る前に俺にへばりついてろ。」

「貴様……！　そのような趣味が……！」

「ちがうわ！　そんな冗談はさておきだ。無詠唱術式だって使ってくる可能性も有る。しかも飛ぶ。もしかしたら尾もあるかもしれないし可也手ごわいんだぞ？」

「望む所だ。」

あぁ、戦闘狂だからこういう返事は予想していたけど……。

とりあえず今夜決行ということで俺達は準備を進めた。俺は付与術式の施してある愛用の銃とダガー。各種付与が施してある急所部分を護るだけの防具と腰に弾丸の入ってるポーチ。軽装だがコレくらいの方が動きに制限が無く良いと思う。

相棒は上は柄物のTシャツに下はジーンズのみ。腰に愛用の剣を携えてる。一見すると相手を舐めきってるが実はTシャツもジーンズも世界で3人くらいにしか作れない超超強力な付与がしてある。それに加え自身にも付与をしてあるので格好の割りには案外重装備だったりする。

「さて、でかけ「伏せろ！」」

俺の声に相棒の声が重なったと思うとその瞬間頭を押さえつけられ土下座の格好となる。

抗議の声を上げようと顔を上げた俺だったがその瞬間絶句した。

事務所の上半分は切り取られ音を立てながら崩壊していく。その切り口は鋭利な刃物で切り取られたかのように綺麗だった。

『ふん。生きているか人間。』

その声は忘れることも無い。あの襲撃の時に聞いた竜の声だった。

・5　強襲（後書き）

ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6976f/

DragonFang

2010年10月28日07時55分発行